

自主的安全性向上・技術・人材WGの議論の中間整理に係る委員コメントと修正箇所

修正 番号	修正 箇所	修正前	修正後	修正部分に係る委員コメント
1	1. (1) 1 つ目 ■ ※新規	—	<u>福島第一原子力発電所事故を契機に、原子力事業者等の産業界や政府をはじめとして、原子力に関わる関係者が「過酷事故は絶対に起きない」との「安全神話」に陥り、過酷事故のリスクや安全性の向上に向けた検討や対策が十分に行われていなかったこと、またそうした状況が外部からはなかなか見えず、改善の動機も生じづらい閉鎖的な状況（いわゆる「原子カムラ」）に陥っていたことが明らかとなった。原子力発電が複雑かつ高度な技術体系であることもあり、そのリスクや安全性に関して国民への継続的な理解活動が求められているが、まだまだ不十分である。こうした状況は、原子力事業者、経済産業省をはじめとする原子力の「専門家」の取組に対する国民の懐疑、ひいては原子力発電そのものに対する国民の不安にも繋がっている。</u>	○今、語られているのは大きく専門家、もしくは専門家集団への信頼という文脈で議論が進んでいますが、専門家とか専門家集団への信頼というのはある種の透明性を確保するとかいろんな形でまだでき得る余地というのがあると思います。一方で専門知への信頼というものは、どこかにどうしても限界があるというか、ゼロリスクではないということをおっしゃっていることも含めて、多分専門家への信頼が欠如しているのと同時に、専門的な知識というものに対して、90 年代とかに比べると確実な専門知はないことが、原子力だけに限らず他の分野でも言われていることですし、そういう理解が広がっていると思います。そうするとそのあたりを少し文章上で整理できるかわかりませんが、ここで言っている信頼とは何に向けての信頼なのかという話ですとか、あと幾つか東日本大震災の福島の事故を経て信頼が失われた、欠如されたというのがよく語られることですが、そもそもその前に信頼はあったのかと言われると、そうではない部分も当然あると思うので、福島の事故が要は分かりやすく信頼の欠如を示したものであって、もともとあったものは何で、失われたものは何なのかというものの整理も、過去の見直しという議論が出ていますので、その中でなされて行くべきなのかなと思っている。（八木委員） ○信頼構築に関して、我が国では専門家への信頼という問題がある気がします。これは原子力に特有のことでは必ずしもないのではないかと、外国の人間と話をしているように私は思っていま

修正 番号	修正 箇所	修正前	修正後	修正部分に関する委員コメント
				すが、原子力が特にそうであるならば、なぜそうなっているのか、それについてはどうしたらいいのかということをこの論考の中でやっていく必要がある。(尾本委員) ○取りまとめの基本的認識のところに明示的に信頼関係について言及してはどうかと思います。信頼関係について考えるときに、そもそもなぜ今、原子力に対して国民からの信頼関係が毀損されたのかというところから考える必要があって、それはもちろん事故が起きたことありますが、それだけで信頼関係が失われたというわけではなくて、その背後にあるものに対して信頼されていないということだと思います。それは一つは安全神話ということですし、だからこのワーキンググループで安全神話からリスクインフォームドディシジョンメイキングということで議論しているわけです。それからもう一つ安全神話に加えて、村ということです。村ということで透明性を欠いていたのではないかな。だから情報公開のあり方について議論しているわけだし、村のもう一つの透明性に加えてもう一つの欠点は、内部できちんと議論していないことで、だからピアプレッシャーでということなわけです。信頼関係がなぜ毀損されたのかというそのメカニズムも踏まえて、なぜこのワーキンググループでリスクインフォームドだとか、ピアプレッシャーだとか、情報公開という話をしているのかというところを、このワーキンググループも大分たつので、もう当たり前になってきたところなので書いていないのかもしれないかもしれませんが、やはり書いておいたほうがいいと思います。(梶川委員)
2	1. (1) 2つ目■	原子力発電には、 <u>自動車や飛行機と同様に</u> 「ゼロリス	原子力発電には、「ゼロリスク」は無く、どれだけ安全対策を行った	○1 ページ目の一番冒頭になりますが、「原子力発電には、自動車や飛行機と同様にゼロリスクは無く」という表現がありますが、

修正 番号	修正 箇所	修正前	修正後	修正部分に関する委員コメント
		ク」は無く、どれだけ安全対策を行ったとしても残余のリスクは残る。 <u>それらのリスクと比較して、原子力は確率的には頻度は低い</u> が、ひとたび燃料の損傷を伴う大きな事故に至れば、影響は甚大であるという特性がある。	としても残余のリスクは残る。 <u>また、確率的には頻度が低いものの、ひとたび燃料の損傷を伴う大きな事故に至れば、事故の影響は甚大であるという特性を持つ。</u>	ここで自動車や飛行機と同様にとという言葉が要るのかという、リスクの種類が全然違いますので、文意としては単純にゼロリスクではなくで通用すると思いますので、ここは可能なら削除していただきたい。(八木委員)
3	1.(1) 4つ目■	可能な限り合理的に	<u>合理的に可能な限り</u>	○「可能な限り合理的に」という表現がありますけれども、これは「合理的に可能な限り」とすべきかと思います。(糸井委員)
4	1.(1) 5つ目■	■ このため、まずは、原子力発電に携わるあらゆる関係者が、自らの役割をしっかりと果たし、望ましい取組のあり方を自らに問いかけ続け、安全性を高めていく努力を行う。	■ このため、まずは、原子力発電に携わるあらゆる関係者が、自らの役割をしっかりと果たし、望ましい取組のあり方を自らに問いかけ続け、 <u>原発の稼働状況に関わらず、安全性を高めていく努力を行う。</u>	○再稼働して運転段階に入ればもう終わりなのかということではないことを、しっかりとこの中に書き込んでいただけるような記述が必要。今は再稼働イコール自律的なシステムと見られがちなところを、どのように今後も運転中に継続的に安全性向上をしていくのが非常に重要なポイントだと思う。(関村委員)
5	1.(1) 7つ目■	<u>こうした好循環を生む「継続的な原子力の安全性向上のための自律的システム</u> （以下「自律的システム」と言う。）」の確立を目指す。	<u>これらの取組により、万が一トラブルや事故が生じた場合であっても、それらを乗り越えていく、</u> 「継続的な原子力の安全性向上のための自律的システム（以下「自律的システム」と言う。）」の確立を目指す。	○好循環を生むというのは結果としてはそういうふうオーバーオールに考えることができるかもしれませんが、場合によってはゼロリスクでないわけですから、さまざまなトラブル、事故があったとしてもこれを乗り越えて継続していけるような自律的なシステムであるべきです。ここがもう少し明確にうたわれるべきだろうと思います。(関村委員)
6	1.(2) ①	(必要な機能) ー原子力産業界は、安全対策の状況やパフォーマンス等	(必要な機能) ー原子力産業界は、安全対策の状況やパフォーマンス等について、それ	○信頼関係とワンボイス、これは切り分ける必要があると思います。安全性や規制について、ワンボイスで発信するというのは以前の原子力村と同じですので、ワンボイスというのは必ずしも信

修正 番号	修正 箇所	修正前	修正後	修正部分に関する委員コメント
		について、それぞれ又は <u>一丸</u> <u>となって</u> 、国民・自治体・報道機関等のステークホルダーに対し、丁寧でわかりやすい情報発信を積極的に行う。また、ステークホルダーからの質問・意見を受け止め、改めるべきところは改めるなど、真摯に対応する。	ぞれ又は <u>適宜</u> 協力し、国民・自治体・報道機関等のステークホルダーに対し、丁寧でわかりやすい情報発信を積極的に行う。また、ステークホルダーからの質問・意見を受け止め、改めるべきところは改めるなど、真摯に対応する。	頼関係を回復するのには貢献しない。(梶川委員)
7	1.(2) ①	「継続的な原子力の安全性向上のための自律的システム(イメージ)」	「継続的な原子力の安全性向上のための自律的システム(イメージ)」を修正	○例えば2ページ目の図のところで、自治体とか国民の役割みたいなものの書き込み方というのは少し慎重に吟味する必要があると私個人としては思います。またこの図自体を今見直してみると、この緑のところ、社会一般でくくっていることに大分限界が見えてきているようにも感じます。ワンボイスで出す先というのは、多分広く国民一般というものを想定していらっしゃるでしょうし、先ほどから出ている現場レベルでの細かなというのは、多分立地自治体とかもう少し濃くということを想定されていると思いますので、もしかするとその議論に合わせて少し図の修正というものも考えていくべきではないかと思います。(八木委員)
8	1.(2) ②	可能な限り合理的に	<u>合理的に</u> 可能な限り	○「可能な限り合理的に」という表現がありますけれども、これは「合理的に可能な限り」とすべきかと思います。(糸井委員)
9	1.(2) ③	電気事業者や規制機関等をはじめとする関係者は、上記の共通目標の達成に向けて、健全な形で対話を重ねていく必要がある。	電気事業者や規制機関等をはじめとする関係者は、上記の共通目標の達成に向けて、健全な形で <u>の対話(安全に対する共通の目標の下、互いに建設的な意見を交わすこと)</u>	○電気事業者や規制機関を初めとする関係者は、共通目標の達成に向けて健全な形で対話を重ねていく必要があることが書かれています。健全な形がどういうことを言っているのかちょっと理解しにくいと思いました。(秋庭委員)

修正 番号	修正 箇所	修正前	修正後	修正部分に関する委員コメント
			を重ねていく必要がある。	
1 0	1. (2) ④	全ての個人が、物事をありのままに指摘できる強さを持ち、組織はその指摘を真摯に受け止めて必要な対応を行う	全ての個人が、 <u>臆することなく安全上の関心事項について</u> 指摘できる強さを持ち、組織はその指摘を真摯に受け止めて必要な対応を行う	○3ページのところで見ると、安全文化のところ、物事をありのままに指摘できる強さというのは、これは多分安全上の関心事を指摘できるということを言っているのだと思います。(尾本委員)
1 1	1. (2) ⑤	可能な限り合理的に	<u>合理的に</u> 可能な限り	○「可能な限り合理的に」という表現がありますがけれども、これは「合理的に可能な限り」とすべきかと思います。(糸井委員)
1 2	1. (2) ⑤	原子力のリスクと適切に向き合い、これを合理的に可能な限り低減させるには、リスクの分析・評価をしっかりと行い、科学的合理性の高いリスク管理及びリスク低減対策が実施されているか否かを把握すること、その結果に応じて必要な対応を講じることが重要である。	<u>リスク情報を活用することによって、安全対策における資源の合理的な配分が可能となる。</u> 原子力のリスクを合理的に可能な限り低減させるには、リスクの分析・評価をしっかりと行い、科学的合理性の高いリスク管理及びリスク低減対策が実施されているか否かを把握すること、その結果に応じて必要な対応を講じることが重要である。	○3ページのところで見ると、リスク情報の活用というところは、何々が重要であると最初から断言していますが、なぜ重要なのかということが分かるように書いていない。(尾本委員)
1 3	1. (2) ⑥	電気事業者、メーカー、ゼネコン、研究機関、学協会、原子力政策所管官庁等の関係者が、安全性向上への具体的な課題を把握・共有し、一丸となって、その解決を目指した研究開発を進めていく必要がある。	電気事業者、メーカー、ゼネコン、研究機関、学協会、原子力政策所管官庁等の関係者が、安全性向上への具体的な課題を把握・共有し、 <u>先に取りまとめた軽水炉安全技術・人材ロードマップ等に基づいて</u> 、一丸となって、その解決を目指した研究開発を進めていく必要がある。	○今申し上げました多様性の価値というところには、図にもございましたが、最新の知見というのを継続的に生み出す仕組み、これとかみ合ったものであるべきだろうと思います。知っていることだけをワンボイスというのではなくて、新たなものに対してどのように謙虚に臨んでいくか。もちろんこれは研究開発という観点もございますし、だからこそのワーキングでは、人材、研究等に係るロードマップとの関連をしっかりと議論してきたが、それに対するコメントがこの中間まとめの中には一切ないことについて

修正 番号	修正 箇所	修正前	修正後	修正部分に関する委員コメント
				ては非常に残念でございます。多様性を生み出していく、将来に対して継続的な努力をしていく、もちろん今お話がありました人材のことも同様に、学会とも協力させていただきながらロードマップをつくってきたわけでございますので、研究の価値というものをごきちんとこの中にも入れ込んでいただくところまで、何らかのご説明が入っていけばいいのかと思いました。（関村委員）
14	2. ②	② <u>自律的システムの「コア」となる機能の整備</u> 本WGにおいて、「ロードマップの骨格」等を踏まえ、 <u>自主的安全性向上のコア機能を担うNRRC、JANSIを中心とした取組のあり方、具体的には、自律的システムのコア機能である</u>	② <u>安全性向上に向けた取組をサポートする機能の整備</u> 本WGにおいて、「ロードマップの骨格」等を踏まえ、 <u>安全性向上に向けた取組をサポートする機能</u> を担う <u>NRRC、JANSI</u> を中心とした取組のあり方、具体的には、	○4ページで、コアとなる機能の整備というので、NRRC、JANSIを中心とした扱い方で、その自律的なコアであるリスク情報の価値云々とありますけれども、このNRRCとかJANSIがやってきたことは別にコア機能ではないと思います。（中略）。NRRCとかJANSIがやってきたことというのは、コア機能をサポートする機能、方法論の構築だとか、標準的な手順の作成とか、そういったことは8ページを見るとまさにそういう表現でされていて、4ページと8ページで少し言うことが違うかなという気がします。ですからコア機能というものをここで持ち出して議論するのがどうも抵抗がある。（尾本委員）
15	3. ③	<u>コア機能の整備の進捗</u> を踏まえ、今後、早急に力を入れていくべきは、各電気事業者が、リスク情報やピアプレッシャーの仕組み等を活用して、実際に安全性を向上させる実績を積み重ねていくことである。 ～ 中略 ～ このように、各プレイヤー	<u>安全性向上に向けた取組をサポートする機能の整備の進捗</u> を踏まえ、今後、早急に力を入れていくべきは、各電気事業者が、リスク情報を活用した意思決定（RIDM）やピアプレッシャーの仕組み等を活用して、実際に安全性を向上させる実績を積み重ねていくことである。 ～ 中略 ～ このように、各プレイヤーによる	○4ページで、コアとなる機能の整備というので、NRRC、JANSIを中心とした扱い方で、その自律的なコアであるリスク情報の価値云々とありますけれども、このNRRCとかJANSIがやってきたことは別にコア機能ではないと思います。（中略）。NRRCとかJANSIがやってきたことというのは、コア機能をサポートする機能、方法論の構築だとか、標準的な手順の作成とか、そういったことは8ページを見るとまさにそういう表現でされていて、4ページと8ページで少し言うことが違うかなという気がします。ですからコア機能というものをここで持ち出して議論するのがどうも抵抗がある。（尾本委員）

修正 番号	修正 箇所	修正前	修正後	修正部分に関する委員コメント
		による実践的な取組と並行して、それぞれの実情に応じた「コア機能を補完する仕組み」を産業大で作り込み、システム全体をより効果的なものとしていく。	実践的な取組と並行して、それぞれの実情に応じた「 <u>安全性向上に向けた取組をサポートする機能</u> を補完する仕組み」を産業大で作り込み、システム全体をより効果的なものとしていく。	○5ページに「リスク情報やピアプレッシャーの仕組み」という表現がありますがけれども、リスク情報とピアプレッシャーが併記されているのは少し違和感があります。例えば「リスク情報を活用した意思決定やピアプレッシャーの仕組み」というような表現で、そこにR I D Mと括弧で書いていただくというのが表現としていい。(糸井委員)
1 6	3. ③	こうした情報公開や対話の取組について <u>も</u> 、業界大でのバックアップや標準化等を通じて、より実効的なものとしていくことも大切である。	こうした情報公開や対話の取組については、業界大でのバックアップや標準化等の <u>統一的な対応や、過去の経緯や地域的特性を踏まえた事業者各社による創意工夫等</u> を通じて、より実効的なものとしていくことも大切である。	○産業大でとか、もしくは標準化とか、そういう言葉が結構全体的にトーンとして出てきています。それ自身を否定するものではありませんが、一方で標準化が本当に全てのものに対して必要なのかということは少し吟味がなされるべきかと思います。(中略) 全て全体として標準化してという方向ではないものがあるという余地が表現として残されていると良いと思います。(八木委員)
1 7	3. ③	これは同時に、現場主導・現場発の情報発信による、社会により伝わりやすいコミュニケーションの基盤ともなるものである。	これは同時に、現場主導・現場発の情報発信による、社会により伝わりやすいコミュニケーションの基盤ともなるものである。 <u>この現場主導・現場発の情報発信は、現場や経営陣の発想等により違いが生じるものであるが、そのような違いによる多様性を活かした取組が、社会との信頼関係を構築することに役立つ。</u>	○全体を通じてのワンボイスという言葉が意味するところです。これについては、もう少し明確な定義をしていくべきだろうと思います。(中略)むしろ多様性があることが価値であるという部分、これは現場の声をということでお話があったところですが、むしろ多様性の価値をどのように生かしていくかという観点とワンボイスというところ、これが混同されないように注意書きを加えていくべきだろうと考えているところでございます。これをどのようにうまく信頼関係を得るために説明の中に加えていけるのかということが非常に重要かと思います。(関村委員)
1 8	3. ④	①～③の取組を着実に実行していくことにより、安全性に係るパフォーマンスが向	①～③の取組を着実に実行していくことにより、安全性に係るパフォーマンスが向上し続け、その成果が	○6ページの④に、最終的には各事業者、産業界が信頼を回復していく、これは国民に向けての信頼関係の話ですけれども、それだけではなくて全ての間の信頼関係（電力会社、規制機関、一般国

修正 番号	修正 箇所	修正前	修正後	修正部分に関する委員コメント
		上し続け、その成果がステークホルダーにも認知され、各電気事業者及び原子力産業界が信頼を回復していくことが期待される。	ステークホルダーにも認知され、各電気事業者及び原子力産業界が信頼を回復していくことが期待される。 <u>その際には、社会との信頼関係だけでなく、各電気事業者と規制機関や国際機関等、自律的システムに関わる全てのステークホルダーの間での信頼関係が構築されることが重要である。</u>	民、自治体、政策所管官庁)をしっかりと求めるというのが最終ゴールになろうかと思います。(岡本委員)
19	3. ⑤ (自律的システムのローリングの仕組み) ※新規	—	⑤ 自律的システムの実効性についての検証と改善を行う仕組み <u>上記の取組により確立を目指す自律的システムは、多くのステークホルダーの関わる複雑な構造となるため、その実効性について定期的に確認し、場合によってはシステムの構造を柔軟に変えていくことが重要である。</u> <u>そのため、電気事業者をはじめとする関係者には、安全性の向上には終わりが無いことを肝に銘じ、自らの取組、及び自律的システム全体のあり方について、不断の検証と改善を行っていくことが求められる。</u>	○自律的システムがうまく回っていくかどうかというのを実際ある程度見ながら、チェック&レビューしながら、必要に応じてシステムを変えていくが必要になると思いますが、そのところの記載をもう少し強化したほうがいいと思います。現在のこの報告書、中間取りまとめ案では6ページ目の一番最後のところに今の話は書いてありますが、別建ての⑤番の項目として書くぐらいの重みはあるのではないかと考えている。(山本委員)
20	4. 1つ目■	今後、安全目標の策定、人材育成の仕組み作り等、ソフト	今後、安全目標の策定、 <u>リスク情報の活用</u> の担い手となる人材育成の	○今回のこの取りまとめは、時間軸が比較的短い内容で、人材育成というのは結構長い時間スパンの話になるので、具体的な取組に

修正 番号	修正 箇所	修正前	修正後	修正部分に関する委員コメント
		面での共通インフラの整備、各電気事業者による RIDM の活用の実践・実績作りを加速していく。	仕組み作り等、ソフト面での共通インフラの整備、各電気事業者による RIDM の活用の実践・実績作りを加速していく。	はまだ書き込めなかったのかもしれませんが、少なくともリスク情報の活用に関した人材というものの対応が重要な課題であると私自身感じています。(高橋委員)
21	<必要となる主な機能と役割分担>		必要となる主な機能→考えられる役割分担 の順で記載方法を修正（最終ページに記載）	○8ページのイメージですが、まとめ方が各組織をベースに、組織が何をやるかになっている。7ページにまとまっているのは、機能でまとめられています。機能でまとめられた上で、その機能はどこの組織のどの部門が担当するとか、前後、逆に書いていただくと、もしかしたら必要な機能がない、今の組織の中ではない、もしくは複数の組織でまたがって対応しているようなものが見えてくるのではないかなと思う。(岡本委員)

岡本委員コメント（No.21）に対する修正案

修正前	修正後
<必要となる主な機能と役割分担（イメージ）> ①「改革を実践する基本単位」：各事業者 ・経営及び現場における、<u>RIDM</u>等の先進的な手法の導入 ・職員に対する教育やサポートの内容・手法の拡充・改善、社内オーバーサイト機能の創設、<u>PI</u>の設定・継続評価等による上記の定着 ・これらの取組状況・成果の地域社会等への効果的な発信 ・<u>JANSI</u>等を通じた他社へのエクセレンスの共有 ②「各事業者の改革を教導・支援する機能」：<u>NRRC</u>、<u>JANSI</u>、<u>原産協</u> —<u>NRRC</u>—：原子力産業界としての安全目標の策定 PRAの手法開発と各事業者への展開支援	<必要となる主な機能と役割分担（イメージ）> ① 改革を実践する基本単位」 ・経営及び現場における、<u>RIDM</u>等の先進的な手法の導入 ・職員に対する教育やサポートの内容・手法の拡充・改善、社内オーバーサイト機能の創設、<u>PI</u>の設定・継続評価等による上記の定着 ・これらの取組状況・成果の地域社会等への効果的な発信 ・<u>JANSI</u>等を通じた他社へのエクセレンスの共有 <u>【各事業者】</u> ②「各事業者の改革を教導・支援する機能」 ・原子力産業界としての安全目標の策定 <u>【NRRC】</u> ・<u>PRA</u>の手法開発と各事業者への展開支援 <u>【NRRC】</u>

ー原産協等：安全対策に係る経営・現場の人材育成フォーマット・認証システム等の策定（※<u>JANSI</u>・大学・研究所等と連携） ー<u>JANSI</u>：原子力産業界における安全文化の醸成の支援 ③「各事業者の改革を確実にし、加速させる機能」（動機付けの仕組み）：<u>JANSI／（原子力産業界のリーダーシップ機能を担う）電事連</u> ー<u>JANSI</u>：現場対応を中心としたピアレビューと改善指導の徹底、エクセレンスの共有・普及 ー電事連： 例）・事業者ごとの改革状況（<u>RIDM</u>の実施状況、<u>PI</u>の推移等）の「見える化」の仕組み作り ・事業者共通の「経営レベルの内部監察」の仕組み作り・導入（社外ステークホルダー（他社 <u>CNO</u> 等有識者等）の内部オーバーサイト機能への取り込み 等） ④「改革成果を安全性のさらなる向上につなげる機能」：<u>（原子力産業界のリーダーシップ機能を担う）電事連</u> 例）・各事業者・現場の知見の集約と、メーカー・ゼネコン等と協働した技術的課題への対応（共同 <u>R&D</u> 等、電中研・原産協と連携） ・規制当局等への建設的な提言（自主的な安全性向上の取組の実績を踏まえた、<u>ROP</u>の円滑な実施のための方策の提案 等） ・各事業者主体の情報発信・コミュニケ等に対するサポート（従来の情報発信のあり方の検証、「現場からの発信」や「双方向コミュニケ」の好事例のヨコ展開 等）	・安全対策に係る経営・現場の人材育成フォーマット・認証システム等の策定（※<u>JANSI</u>・大学・研究所等と連携） <u>【原産協等】</u> ・原子力産業界における安全文化の醸成の支援 <u>【JANSI】</u> ③「各事業者の改革を確実にし、加速させる機能」（動機付けの仕組み） ・現場対応を中心としたピアレビューと改善指導の徹底、エクセレンスの共有・普及 <u>【JANSI】</u> 例）・事業者ごとの改革状況（<u>RIDM</u>の実施状況、<u>PI</u>の推移等）の「見える化」の仕組み作り ・事業者共通の「経営レベルの内部監察」の仕組み作り・導入（社外ステークホルダー（他社 <u>CNO</u> 等有識者等）の内部オーバーサイト機能への取り込み 等） <u>【原子力産業界のリーダーシップ機能を担う電事連】</u> ④「改革成果を安全性のさらなる向上につなげる機能」 例）・各事業者・現場の知見の集約と、メーカー・ゼネコン等と協働した技術的課題への対応（共同 <u>R&D</u> 等、電中研・原産協と連携） ・規制当局等への建設的な提言（自主的な安全性向上の取組の実績を踏まえた、<u>ROP</u>の円滑な実施のための方策の提案 等） ・各事業者主体の情報発信・コミュニケ等に対するサポート（従来の情報発信のあり方の検証、「現場からの発信」や「双方向コミュニケ」の好事例のヨコ展開 等） <u>【原子力産業界のリーダーシップ機能を担う電事連】</u> <u>※いずれの機能においても、事業者による国民や自治体等への説明責任が伴い、国民や自治体等は産業界の安全性向上に資する問いかけを行う。</u>
---	---